文化庁「日本語教育委託事業」を続けて

聖徳大学教授　北 村 弘 明

聖徳大学でこの文化庁委託事業を始めたのは、2008 年のことです。この時、私たちが目指した事業コンセプトは「本当に外国人の生活支援になるための日本語指導」について、もう一度、地域日本語教室指導員のみなさんに考えてもらおう、ということでした。と言うのも「文法と単語とをしっかりと指導すれば、日本語は話せるようになる」などの単純な思い込みによる、知識に訴えるだけの「文法説明型授業」や、教養型の「日本語学習熟」のような授業が多く見受けられたからです。

募集要項を地域日本語教室を中心に配布すると、多くの地域から老若男女の予想を超える申し込みがあったのには、少々驚きました。教室の広さ、設備の制限で、申込者全員を受け入れることはできませんでしたが、全 25 回、総時間数 75 時間、参加者 50 名の日本語教員養成講座がこうして始まりました。

「ボランティア日本語教室の指導はかくあるべきだ！」と、一つの流儀を押しつけることは、もとよりナンセンスです。いろいろな理念や地域での事情もありますから。でも、この文化庁委託事業の「『生活者としての外国人』のための日本語教育事業」というタイトルに入っている『生活者としての外国人』というコンセプトは、とても重要です。「日本での生活がスムーズにおこなえるための日本語会話力育成」という目標は、地域日本語教室にも共通しています。しかし、そうした思いと実際の指導内容とが正しく噛み合っていなければ、

▲教室の中は受講生の熱気でムンムン……

その情熱や指導は徒労に終わりかねません。

５ヶ月におよぶ長期研修にもかかわらず、みなさんとても熱心に受講を続けられました。何よりも大きな成果だったのは、ここでおこなわれたグループ・ディスカッション、ワークショップなどを通じて、地域間の交流ができたこと、また自分一人が抱え込んでいた問題に解決の糸口を見出した人たちが少なくなかったことです。それまでも、各団体では、独自の日本語教師養成講座や研修会などを自前で開催し、それなりの向上努力はされていたのですが、長期間、それも他の地域の人たちと共に問題意識を分かち合うという経験は初めてだったようです。講座を終えた後、受講者全員の懇親会を設けたのですが、その場で「もう終わってしまうのは残念だ」「こうした講座は定期的に続けて多くの人たちに受講してもらいたい」との感想が多く語られました。

それ以降、本学では毎年
2009 年度「職業スキルを活用する日本語教師養成講座」
「地域の日本語教育を指導「助言する上級教師養成講座」
2010 年度「外国人のニーズを重視した地域社会適応型の日本語指導者養成講座」
2011 年度「Can-do 型授業活動を実現するための実践研修講座
2012 年度「Can-do 型授業におけるポートフォリオの運用研修講座」
というように、連続して文化庁委託事業に参加し、事業を積み重ねてきました。一回一回を見ると単発のテーマによる講座のようにも見えますが、本当は前年度の研修を踏まえて、徐々にレベルアップをはかろうとする意図がありました。また、実際、前年度からのリピーター？受講者も多く、長期の目で見れば、数年におよぶ連続講座のようになりました。

主催である聖徳大学言語文化研究所や運営委員も一所懸命取り組みましたが、この一連の講座を支えてくれたのは、やはり受講者のみなさんの情熱と探求心でした。外国人に日本語を教え始めて、「日本語を教えることがこんなに難しいことだとは思わなかった」という感想はよく聞かれることです。各地域日本語教室では、自前の日本語指導講座などを設けてレベルアップにも努力しているのですが、一方では「簡単な日常会話を教えるのだから、要領よくポイントをつかんでチャッチャと済ませれば、後は試行錯誤で何とかなるよ」という気楽な見方もあります。

▲ 運営委員会では、現時点の見直しと作戦？が練られた

でも、本当に生活の支えになる日本語会話力を効率的に教えることは簡単ではありません。地域日本語教室の大部分はボランティア指導員によって運営されており、さまざまな問題を抱えながら尽力され

ているのです。「所詮は素人集団だろ！」という見方はここでは誤りです。即、実益性が求められるだけに、常にいろいろな工夫や配慮が求められます。そうした中で、文化庁委託事業等の国による支援は、精神的な支えにもなっています。そして何より、これを機会に広域な指導者同士の交流の場が提供されることにより、情報交換や問題点の共有、直面すべき課題などが客観的に意識され始めてきています。そして、こうした取り組みは、一気呵成にやり遂げられるものではなく、本当にその意義が隅々まで浸透していくには、長い時間がかかります。

「日本語教育の最新の動向を学べた」
「各地域団体で実践している活動「教え方について、東葛地域以外での取り組みも知りたかった」
「Can-do 型学習やポートフォリオ等、初めて学ぶことができ、とても新鮮でためになった」
「昨年よりも、Can-Do 型授業についてまた少し理解できるようになった」
「いかに学習者中心、生活支援の日本語支援でなければいけないか、ということがよく分かった」
「ポートフォリオの概念と有用性について理解できた」
「実際の授業風景などを見て、自分も模擬授業を体験してみたいと思った」
「何のために日本語を教えるのか、について改めて考えさせられた」
「何人もの先生方から異なる視点でお話しをうかがい、Can-do 型授業への理解が深められた」
「所属している日本語教室のメンバーの素晴らしさを感じることができた」（この講座と連動して日本語授業をやってみて）
「地域に戻った時に、とても役に立ちそうなことが多く、少しずつ実行していこうと思っている」
「他地域の団体の方々と情報交換やご縁ができ、今後につながりを持てそうで、有難いと思っている」

これらは、今年度委託事業のうち、人材養成講座受講者の感想・要望の一部です。委託事業を数年続けてきて感じることは、こうした取り組みが確実に地域日本語教室の向上や広域の日本語教室ネットワークの構築に寄与しているということです。講座の受講生の見識も年々深まり、より高いレベルの課題に目が向くようになってきたと思います。講師をご依頼した外部の諸先生も、こうした受講生の要求によく応えてくださいました。

考えてみれば、ボランティア有志の皆さんなどで運営されている地域日本語教室の存在は、「生活者としての外国人」に対するかけがえのないコミュニティの場を提供するものになっています。外交においても難題を抱える今日こそ、今後も国家が、この委託事業の意義をさらに喧伝され、真の国際交流の礎となっていくことを心より願い、わたしたちも今後の活動に臨みたいと思います。